トリ目・ウオの目・おか目はち目 ⑲

「ミスター・ヒロミッツのくるま座」

福岡女学院大学客員教授
斎藤裕三

「今年から、日本では四月一日が『エイプリル・オネスツ（正直な人の）・デー』に変わったげな」

「ソージキ？　そらまたなしかいね」

「雪印事件でわかろうが。日本人はこの頃一年中嘘ばっかりついてくさ、バレたら『申し訳ございません』とか、社長さんが頭ば下げござろうが。すまんですむなら警察はいらん。だけん、せめて四月一日ぐらい、日本中が嘘つかんデーにしょうやないかということですでー」

「うっそう」

まったく、何が嘘か本当か。信じられるのは、正直爺さんが借りたポチぐらいのもんですなあ。『うわさ』も文字どおりうわさですけん、信じられんですばい。第一、寺田編集長はポチというには大き過ぎます。身長一八〇㌢近いポチなんてねえ。ま、ポチポチいきまひょう。

だが、乱れ放題の日本を立て直せるのは、決して政治ではない。政治の世界では「言った」「言わん」の争いばっかりで、なんしょうとかいっちょんわからん。あげんことぐらい、小学一年生でもできる。

そう。だから正義の旗振りは、西部劇の時代から今日まで、常に新聞（ジャーナリズム）の役目だったのである。

ウォルター・リップマン（一八八九～一九七四）が《ヘラルド・トリビューン》紙に書き続けたコラム「今日と明日」は、三〇年代末には一八四紙に掲載され、その影響力は絶大だった。彼の代表作『世論』は、今日でも現代コミュニケーション研究の古典となっている。

「トリ目・ウオの目」もそのうちピューリッツァー賞を授与され、エッセーの古典となるであろう。しょうがないな。

アメリカには、もう一人偉大な記者がいた。ジェイムズ・バーレット・レストン（一九〇九～）。多くのスクープをものし、二度もピューリッツァー賞を受賞。

バランスのとれたリベラルな論評で、《ニューヨーク・タイムズ》の象徴的な存在となり、国際的にも厚い信頼を得た。リップマンの後継者ともいわれたが、若干違って徹底した現場主義者だった。

この現場主義は、記者にとってとても重要である。西日本新聞社の論説委員長を昨年定年で退き、現在関連会社の役員をしている大野誠氏は古くからの知己。

彼が西日本新聞社に入社して三年目、佐世保港に「エンタープライズ」というアメリカの原子力航空母艦がボカンと入港した。日本全国から押し寄せた労働団体・学生に対応するのに精一杯で、若手記者は翻弄されっぱなしだった。

しかし、その後原子力潜水艦が入港した時、日本政府の発表に反し潜水艦から放射能が洩れているのを、粘り強い取材活動で大スクープし、押しも押されもせぬ優れた記者であることが証明された。

彼が高校生の頃、英語を一緒に勉強した。筆者が日航本社の文書課長をしてい

アサヒビール株式会社博多工場
福岡市博多区竹下３丁目１番１号
電話 福岡（092）431－1131～8

た頃、彼は政治経済担当の在京記者として、丸の内の本社によく現れた。

大野氏は大分総局に勤務したが、後に日曜朝刊に書いた随想を『豊の心　おおいた満山をゆく』という本にまとめた。

普通の総局長は、二年半の任期中にめぼしい場所を回り、そして去っていく。

だが、平松守彦大分県知事は、この本の序の中で彼をこう評している。

大野さんはひと味違っていたように思う。……彼は大分の料理、温泉、自然に接しているうちに、だんだん大分への思い込みが強烈となり、過疎や山村地域で、悪戦苦闘している人と直接交流し、外側からでなく、内側から大分の歴史、文化を研究し、その中で育まれる人間を洞察するようになる。

さすがの慧眼に驚くばかりである。ただ、内側からがいいのか、外側からがいいのかは、バランスの問題である。

記者は権力におもねってはならない。ここが外務省の役人と違う点である。

昔、西日本新聞社の前身だった福岡日日新聞社に、菊竹六鼓（明治13～昭和12）という記者がいた。

福岡の生まれで、今の早稲田大学を出て西日本聞社に入り、編集長、主幹、編集局長など歴任し、副社長にまでなった。

記者も上りつめると、色々な腐れ縁ができ、俗物になる人も少なくない。

しかし、菊竹は違った。昭和七年の五・一五事件の時、「首相兇手に斃る」「敢て国民の覚悟を促す」などの社説をかかげ、果敢に軍部批判を展開し、久留米第12師団の圧力にも屈しなかった。

今の永田町界隈の政治記者たちに、爪の垢でも煎じて飲ませたい。

ＮＨＫ政治部出身で、左遷された経験も持つ川崎泰資氏は、『ＮＨＫと政治―蝕まれた公共放送』（朝日文庫）の中で、政治批判番組の放送中止や、政権主導の会長人事などに触れ〝皆さまの〟のＮＨＫは、ジャーナリズム精神を捨て去った政府の「広報機関」にすぎないのかといい、ジャーナリズムと権力との癒着を痛烈に批判している。

川崎氏と、朝日新聞の論説委員を勤めた柴田鉄治氏共著の『ジャーナリズムの原点』（岩波書店）も、現代のジャーナリズムに対し警鐘を鳴らしている。

西日本新聞社の「マスケンさん」こと益田憲吉氏は、ユニークな記者だった。

「筆をとれば天下無敵　刻々の流れをズバリズバリと切って切って切りまくる。痛快無比！　率直明快！　ストレスなんか吹き飛ばせ！」

「トリ目・ウオの目」へのお褒めかと思ったら違った。『マスケンのくるま座』（西日本新聞社）の裏表紙の言葉である。

喫茶の「風月」が因幡商店街の方にあった頃、2階の喫茶コーナーの常連席に、いつもマスケンさんが座っていた。ここは、将来大物になった文化人や財界人がいつもたむろしていたサロンで、会えば「やあ」で始まる情報交換の場だった。貧乏学生はメニューにない「ミルヒー」という安コーヒーを注文した。

マスケンさんのコラムは確かに威勢がよかったが、『教育の選択―国家なき個人はあるか』『日本人の選択―二十一世紀へ生き残る戦略』（両著書とも山手書房）で見るように恐いことも書いてある。

例えば後者の序に次の一文が見える。

中国四千年の歴史に不滅の一頁を刻んだ毛沢東ですら、操り人形であったというのが私の見解である。テキサスの空軍基地で飛行訓練を受けているパーレビの子息のレザ（かっての皇太子）も二十歳の成人を迎えたが、仕掛け人たちは、いつかは使う駒の一つとして、温存しているのである。そして〝仕掛人〟の脚本に書かれている〝最後〟の一幕は、なんであろうか。

マスケンさんの息子さんの奥さんが、日航福岡空港支店で同僚だった。

刃物の豊勝

新天町

CLUB AZAMI

博多区中洲４丁目１―37
ＴＥＬ 代表（281）0417